

「しつけ（躾）について考える」

しつけ（躾）とは、人間の子どもが、人間社会・集団の規範、規律や礼儀作法など習慣に合った立ち振る舞い（規範の内面化）ができるように訓練すること。概念的には伝統的な子どもへの誉め方や罰し方も含みます。また、犬や猫（家畜）の調教、訓練の意味もあります。

しつけとは、教育することと言い換えてもよいのですが、教育一般よりも生活全般に根ざした部分を教えていく行為をさし、特に言葉が理解できない幼児の教育については、さまざまなやり方で「やってよいこと」「やってはいけないこと」の区別をつけさせることでもあります。

昔からのしつけの手法では、罰の中に体罰を含むこともあるため、近年ではしつけは虐待に発展するという問題提起もなされています。実際にニュースなどでたびたび報じられている子どもへの虐待事件では逮捕された加害者が「しつけだった」と言い訳をしている場面も見受けられます。こうしたことからしつけをすることに否定的な考えをもつ人たちがいます。

しかし、一方ではしつけがなければ人間としての道德規範にも関わるという考えもあり、今の若い者は社会的な道德観念やマナーが足りないとして、しつけの重要性を主張する人たちもいます。

いずれにせよ作法やマナー、善悪の判断、人に迷惑をかけないなど人として当然身に備えるべきことを子どもにしっかりと教育することは大切なことです。その教育が「しつけ」であるのか、そうでないのかについては、人によって受け止め方が違うので、ここでは詳しく述べられませんが、「人は人によって人となる」ということを考えると、子どもを諭し、教え導くことは必要不可欠なことです。

人の子どもは、放っておいてもいずれ自分自身で生き方を覚え、それなりにやっていくという放任主義の考え方の人がいます。あくまで子どもの自主性、主体性、子ども自ら考えたことを尊重するというのです。しかし、まともに教育を受けたことのない子どもたちが社会性や自律性を備えていくことなどあり得ません。

放任された子どもの自らの考えを尊重していると、自己都合の最優先が当たり前となり、他者の気持ちや思いなどどうでもいいという人間になりかねません。それこそ「オレオレ詐欺」の犯人、相手の迷惑を一切考えられないストーカーの犯人、交際を断られ相手を殺傷してしまう犯人の予備軍となるかもしれません。

最近の報道では、ストーカー事件や詐欺事件の多いことに驚かされます。どうしてこのような事件を起こす人間が増えているのでしょうか。

家庭や地域社会の教育力の低下、幼児教育、学校教育のあり方などが問われています。自分さえよければよいという人が増えてきている原因は、いろいろと複雑な背景がありそうです。国や地方自治体、教育関係機関などでは、「豊かな心」を合言葉に子どもたちの将来を見据え、あらゆる策を講じています。一概に家庭が、地域社会が、学校がと責任を押しつけることはできません。それぞれが何をなせるかという主体的な自覚が必要です。

昔はよかったということがよく話題となります。一昔前は核家族ではなく、家族の構成員が多く、兄弟も多い中で、子どもは家庭の中で我慢することや思いやることを身につけていったとか、家の中の大人は、近所づきいの中から子育てを学んだりできたとか、昔はどこの家も貧しく、生活そのものに鍛えられていたので、今の時代と比べるとほんのわずかなことでも大きな幸福感や満足感があつた、などなどの話です。

「昔はよかった」と懐かしんでばかりいても、古きよき時代に戻ることができるわけではなく、そこには何の前進もありません。しかし、どのように時代が変わりつつも不易とされる忘れてはならない子育ての基本があるのではないかと思います。

女優の沢村貞子さんの著書「老いの楽しみ」の中のお話です。

小学校2年生の頃、全て「甲」の通信簿(昔の成績は甲乙丙で甲が一番いい)を抱かえて家に帰ったことがある。得意げに成績を自慢した。「できない子だってたくさんいるのよ。左官屋さんの初ちゃんなんか、この間も算術ができなくて・・・」そう言うと、母親が厳しく叱った。「つまらないことをお言いでない。初ちゃんは、算術は下手かもしれないけれど、弟達の面倒はみるし、ご飯の支度だってお前よりずっと上手だよ。人はそれぞれ、みんな、どこかいいところがあるんだからね。いい気になるんじゃないよ。みっともない。」

沢村さんの母親は、成績が悪いといって叱るのではなく、成績がいいといって自慢する子を叱る。自分中心ではなく、人の立場がわかる心を育てようとしたのです。

平凡ですが、今一番忘れられているしつけの精神がここに 있습니다。

身を美しくと書いて「躰」（しつけ）です。